

「ふふふ……油断したわね、ピンクちゃん」

私の目の前にはレアナ——悪の秘密組織・ゾイドの女幹部がいた。私はレアナが操る怪人たちから街を守るために戦ったが、味方の応援が来る前に敗れてしまったのだ。

「くっ……離しなさい！」

「そんなことするわけじゃないじゃない。やつとあなたを捕まえたんだから」

私はX型の板に両手と両足を拘束された状態になっていた。でもこんな拘束は返信している状態なら簡単に抜けられるはずなのに、なぜかそれができない。

「ふふ、この拘束具はあなたを弱体化させる特別なものなの。だから変身してても抜けられないわよ」

「私をどうするつもり？」

「私、結構あなたのことが気に入ってるのよ。だからあなたには私たちの仲間になつてもらおうわ」

「誰がそんなことを！」

怪人をけしかけて人々を苦しめる悪の組織に入るつもりなどない。私は正義のためには闘っているのだ。

「きつとあなたもここを気に入るわ」

「誰がこんなところ……うつ！」

足元から急に触手が現れ、動けない私の体をまさぐる。そしてスーツの上から私の胸に巻き付いた。別の細い触手は私の胸の先にピタリとくっつきぐにぐにと動き始める。

「あ……ああ……っ！」

全身をしばれるような感覚が襲う。私は胸を触手に責められるたびに感じてしまっていた。こんなことで感じたくななどないのに、体が勝手に反応してしまう。

「ふふ、感じてるわね」

「そんなわけ……くっ、ない……！」

レアナが私の耳元で囁く。私は必死に否定した。しかしレアナの責めは止まらない。胸を弄っていた触手が離れ、私の胸に透明な液体を吹きかけた。そこからみるみるうちに私を守っていたスーツが溶けていく。

「くう……っ！」

私はスーツを溶かされて胸を露出させられてしまった。レアナがそれを見て笑う。「あら、もう乳首も立ってるじゃない」

レアナが触手を操り私の胸を激しく揉みしだく。胸は触手にぐにぐにと形を変えられ、そのたびに甘い快感が走った。

「あつ……くつ、あ……！」

私は必死に声を抑えるが、それでも甘い吐息が漏れてしまう。レアナは笑いながらその細い指で私の乳首を引っ張った。

「ひうつ……！」

「ふふ、いい声ね。もっと聞かせてよ」

レアナが触手を操り私の乳首を弄ぶ。胸は激しく揉まれ、乳首もクリクリとつまむように弄られる。レアナはくすくすと笑いながら私の胸を舐めた。

「ちゅ……れろ……ふふ、かわいいわよ」

「くう……あつ、んっ！」

レアナは私の胸の先を舌で舐めた。触手とは違う生暖かい刺激に思わず腰が浮いてしまう。レアナは私の胸を舐めながらいやらしい目で私を見た。

「もう声、漏れちゃってるわよ。もしかして興奮してる？」

「そんな……！　くうっ！」

私は必死に否定するがレアナの言う通りだった。スーツを溶かされて胸を露出させられて乳首を弄ばれて気持ちよくなっている。こんな悪の女幹部なんかに感じさせられるなんて屈辱だ。

「ふふ……じゃあこれはどうかしら」

「あ、ああ……っ！」

レアナが触手を操り、私の乳首に吸い付いた。そして激しく吸い上げながら舌で舐めまわす。胸は触手にぐにぐにと形を変えられ、レアナの舌で舐められるたびに快感が走った。

「あっ！　くうっ、やめ……て……！」

私は必死に抵抗するが拘束されている状態では何もできない。ただレアナの責めを受け入れるしかなかった。レアナの責めは激しくなり、私の胸は触手にぐにぐにと形を変えられ、レアナの舌で舐められるたびに快感が走った。

「あっ、く……あ……！」

「ふふ、気持ちいいでしょ？　もっと素直になっていいのよ」

レアナはそう言いながら私の胸を揉みしだいた。そして乳首を指でつまみ上げる。私はその快感に思わず腰を震わせた。

（ダメ……このままじゃ……！）

私は必死に快感に耐えるが、それでも限界は近づいてくる。レアナの責めはどんどん激しくなり、私はもう耐えられなかった。

「あっ！　あ、ああっ……！」

私はレアナの責めに耐えきれずイッてしまった。胸と乳首で感じさせられてしま

い絶頂したのだ。私の股間から愛液が漏れ、太ももを伝う。レアナはその姿を見て満足そうに笑った。

「ふふ……どうやら気持ちよかったみたいね」

「そんなわけ……ない……！」

私は快感に耐えながら叫ぶ。敵にイカされてしまったなんて認めたくない。しかし私の体は正直に反応してしまったようだ。その様子を見たレアナは笑みを浮かべる。

「ふふ、これはどうかしら」

レアナが触手を操り私の股間に張り付く。そして激しく振動した。私はその快感に思わず声を上げてしまう。

「ひあっ！ あ、あああっ！」

私は腰を浮かせて悶える。レアナはさらに責めを強めた。股間は触手によって強く刺激され、胸も同時に責められる。胸は触手にぐにぐにと形を変えられながら舐められていた。

「あっ！ や……めっ……！」

私は必死に抵抗するが拘束されている状態では何もできない。ただ触手に責められる快感を受け止めるしかなかった。胸と股間を同時に責められ、私の体はどんど

ん高まっっていく。

「あつ！ あ……ああつ！」

そしてついに私は再び絶頂した。しかしそれでもレアナの責めは止まらない。触手が私の股間に液体を吹きかけると、その布が溶けていく。レアナはむき出しになった私の秘部に手を伸ばした。

「あらあ……もう大洪水ね、ピンクちゃん」

「くっ、触らないで……！」

レアナは指で私の割れ目をなぞった。そしてそのまま指を私の中に挿入する。私は歯を食いしばって耐えるが、それでも感じてしまうのを抑えられない。

「あ……くうっ！ ああつ！」

「ふふ、もうこんなに感じちゃって……本当にいやらしい子ね」

レアナは私の中を指でかき回すように動かす。その快感に私はまたイキそうになつてしまった。しかし今度は何とか耐える。

「あら？ なかなか頑張るわね」

「はあ……はあ……そう簡単にはイカない……！」

「そう、ならもつと激しくしてあげるわ」

レアナはさらに私の股間に顔を近づける。そして私の秘部を舌で舐めた。

「ひっ!? ああっ!!」

私はたまらず悲鳴を上げる。レアナはそんな私を見てくすくすと笑った。そして舌を尖らせながら私の中に突き刺すように動かす。私はその強烈な快感に思わず腰を浮かせた。

「ひあっ! あああっ!! やめっ、やめてえええっ!!」

レアナの責めは止まらない。私の中を指で激しく責められ、舌で舐められる。私は必死に耐えようとするが、その快感に抗うことができない。

「ひあ……! ああっ! ダメ……また……!」

そして私は再びイカされてしまう。私の股間から愛液が飛び散り、床に水たまりを作った。同時にとうとう変身が解けてしまう。それを見てレアナは笑った。

「あら……とうとう変身が解けちゃったわね」

「はあ……はあ……」

私は絶頂の余韻で何も答えられない。そんな私を見てレアナはさらに笑った。

「ふふ、じゃあもう少し楽しみましょうか」

「くっ……何を……!」

「言っただしょ? あなたは私たちの仲間になるって」

レアナはそう言うのと別の触手を取り出した。その触手は先端が細くなっていて、

まるで筆のような形をしていた。

「な……に、それ……？」

「ふふ、何かしらね？」

レアナはそう言いながら私の胸に触手を近づける。私は恐怖で体を震わせた。こんなもので責められたらどうなるかわからない。しかし抵抗することはできないのだ。

「やめ……！」

そして触手は私の胸に張り付いた。その瞬間全身に快感が走る。その強烈な快感に私は思わず叫んだ。

「あっ！ ああっ！！ イクツ！！」

今までとは比べ物にならないほどの快感に私は絶叫する。触手は私の胸を激しく責め立てた。

「あああっ！！ ああっ！！ ダメえええっ！！」

私はあまりの快楽に頭が真っ白になる。もう何も考えられない。私はただ快感に身を任せるしかなかった。そしてついに限界が訪れる。

「あっ！ イクツ！ イツちやうううっ！！」

私は体を仰け反らせながら盛大に潮を吹いて絶頂してしまった。レアナがその様



子を見て笑う。

「どう？　すごいでしょう？　細かい触手で乳首をさわさわされて、潮まで吹いて  
イっちゃったわね」

「くっ……どうして、こんなことを……」

「言ったでしょう。あなたには私たちの仲間になって欲しいのよ」

「私は……あなたたちの仲間になんてならない……！」

「ふふ、まだそんな口がきけるなんてすごいわね。じゃあもつと気持ちよくしてあげないとね」

そう言っつてレアナは別の触手を取り出した。今度は少し太めだ。その触手は私の股間に近づいてくる。

「な……何をするつもりなの……？」

私は恐怖で震える声で尋ねる。しかしレアナは何も答えない。そしてゆつくりと私の股間に触手を近づけた。そしてその先端が私の中に挿入される。

「あうっ！　ああっ!!」

私は思わず声を上げた。触手は私の中に入り込み、小刻みに震えるように動く。その振動が今までとは比べ物にならないほど気持ちよかった。

「あ……ああっ！　ダメっ！　こんなのっ！」

私は必死に耐えようとするが、それでも感じてしまうのを止められない。触手はさらに私の中で動き続ける。そしてついに私の弱点を見つけたようだ。触手はそこを責め立てるように動く。

「ひあっ！ あっ！ ああんっ!!」

私はあまりの快感に頭がおかしくなりそうだった。こんな快感は初めてだ。もう何も考えられない。私はただ快楽に身を任せるしかなかった。

「ふふ、気持ちいいでしょう？ でもこれで終わりじゃないわよ」

「あっ……え……？」

私はその言葉に驚く。そして次の瞬間、触手がぶるぶると震え始めた。その振動はどんどん激しくなっていく。

「ひっ……！ ああああっ!! ダメえっ!!」

今までとは比べ物にならないほどの快感に襲われた私は絶叫した。あまりの快感に頭が真っ白になる。そしてその快感はいつまでも続いた。私はイキっぱなしの状態になってしまったのだ。

「ひあああっ！ ああんっ!! イッてるっ！ ずっとイッてるううっ！」

私の股間からは愛液が吹き出し床を濡らしていた。しかしそれでも触手は止まらない。私はただイキ続けるしかなかった。

「あつ、あああんっ！　またっ、またイクッ!!　あああああつ!!」  
そしてついに限界が訪れる。私の体は弓なりにのけぞり痙攣し始め、そのまま意識を失ってしまった。

\*\*\*

「う……ん……」

私はゆっくりと目を開ける。私は冷たい地下室のようところで簡素なベッドに寝かされていた。どうやら気を失っていたらしい。レアナが私を見下ろしていた。

「あら、目が覚めたみたいね」

「……私をどうするつもり？」

「ふふ、そうねえ……」

レアナはそう言いながら私の胸を掴む。そして乳首を指でつまんだ。その快感で思わず声が出てしまう。しかしそれよりも驚いたのは自分の体だった。触手に犯され続けた私の体は敏感になってしまっているようだ。胸を少し触られただけなのに感じてしまった。

「あなたには私たちの仲間になってもらいたい。だからこれを使うわ」

レアナはそう言つて、ヘルメットのようなものを取り出した。そしてそれを私の頭にかぶせる。

「これは……？」

「ふふ、それは洗脳装置よ。これを使うと脳に直接暗示をかけることができるの」  
レアナはそう言つて笑つた。私は恐怖で震える。こんな物を使われたら本当に彼女の仲間にさせられてしまう。しかし逃げる間もなくそれをかぶせられてしまった。  
「な、何……？」

耳元で何かが蠢いているような音が聞こえる。それと同時に頭がぼんやりとしてきた。私は必死に抵抗しようとするが、うまく思考がまとまらない。

「……っ！」

不意に耳の中に何かが入り込んでくる。身体を跳ねさせた私を見てレアナが笑つた。

「ふふ、耳から触手を入れて脳に直接暗示をかけてるのよ」

「う……く……！」

私は必死に抵抗するが、それもむなしく頭の中が書き換えられていくような感覚に襲われる。そして頭の中に何かが入り込んできた。

（あ……ああ……！）

それは私の頭を支配しようとしてくる。私はそれに抗おうとしたが無駄だった。どんどんと思考力が落ちていく。代わりに快感が増していった。

(だめ……このままじゃ……!!)

私は何とか抵抗しようとしたが、それも無駄に終わる。

「ふふ、今ね……あなたの頭の中を直接触手がいじってるのよ？」

「そ、そんな……」

「あなたの脳みそをくちゅくちゅしてるの。わかる？」

「あ……ああ……」

私は恐怖で震えた。このままでは私の脳が完全に書き換えられてしまう。しかし私にはどうすることもできなかった。

「ふふ……気持ちいいわね？ このまま脳を弄られてイっちゃいなさい？」

「ああ……ああ……」

私は絶頂寸前だった。そしてついにその時が訪れる。

「あつ、あああつ!!」

私は盛大に潮を吹きながら絶頂を迎えた。快感のあまり目の前が真っ白になる。そして私の頭の中に何かが入ってくるのを感じた。それは私という人格を書き換えようとしているのだ。